

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

こうしつ み てら せんにゅうじ  
 特集陳列 皇室の御寺 泉涌寺について勉強しよう。

せんにゅうじ しゅんじょう  
 泉涌寺と俊苧

とうふくじ けんにんじ みょうほういんもんぜき せん  
 東福寺や建仁寺、あるいは妙法院門跡とならび、京都東山の観光名所となっている泉涌寺。このお寺の長い歴史を語るうえで、重要な人物や出来事はたくさん存在しますが、とりわけ欠かせないのは俊苧（月輪大師、1166～1227）というお坊さんです。もしかしたら、「はじめて名前を聞いた」という方もいるかも知れません。

しゅんじょう せんにゅうじ ふ か き ほうし でん  
 俊苧については、弟子がまとめた『泉涌寺不可棄法師伝』という伝記が残されているため、事績を追うことが可能となります。それによれば、仁安元年（1166）、肥後国飽田郡、現在の熊本県上益城郡に生まれました。幼くして仏門にはいり、読んだお経は暗記してしまうなど、驚くべき能力を発揮したといいます。おもに九州各地で修行に励んだのち、自身が感じた仏教にたいする疑問を解決し、多くの人々を導くため、当時は南宋とよばれた中国へと留学します。建久10年（1199）、34歳のときでした。

中国での俊苧は、高名なお坊さんを訪ね、「律」という教えを中心に、禅や天台など、さまざまな学問を修めました。もともと、才能があったことにくわえ、たえず努力を重ねた結果、朝野の尊敬を集め、その名は広く知れわたるところとなり、「日本に帰らずにいてくれるなら、正しい教えを受け継ぐ者はもっと多くなる」と漏らす人もいたほどでした。こうして惜しまれながらも、足かけ12年におよぶ留学を終えると、膨大な数のお経や絵画を携え、建暦元年（1211）に帰国します。

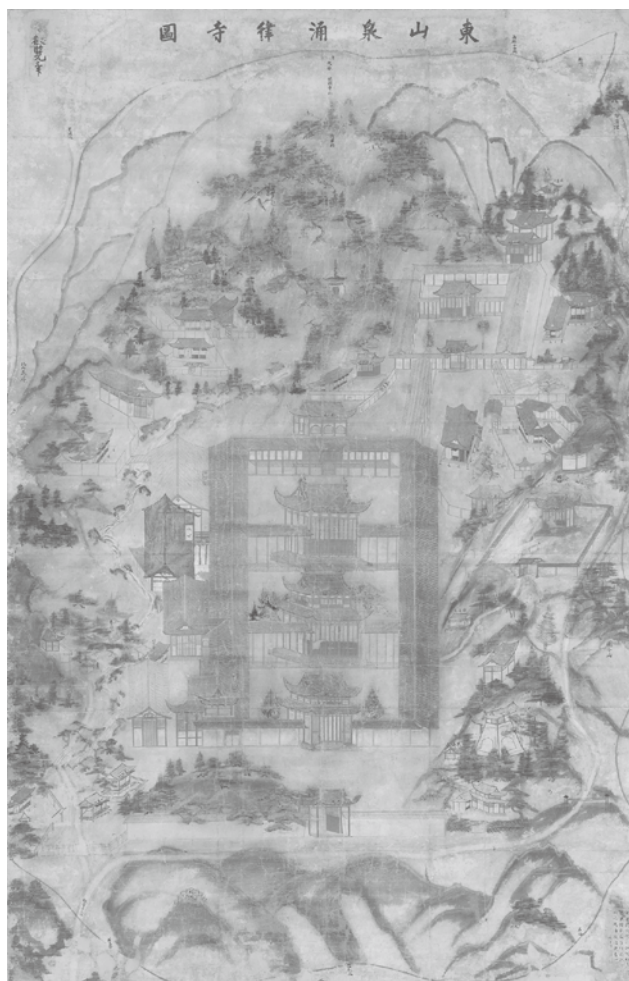


図1 《東山泉涌律寺図》 泉涌寺蔵

日本に帰った俊苧は、各地をめぐりながら、自分が学んだ最新の教えを伝える中国風のお寺を造ることを次第に志すようになります。国内でも貧富を問わず、崇敬をうけるなか、建保6年(1218)には宇都宮信房という武士から土地の寄付をうけました。ここに、泉涌寺は形作られるのです。広く喜捨をよびかけ、主要な伽藍はほぼ完成したようですが、嘉禄2年(1226)の冬ごろから病気にかかり、その翌年、多くの弟子たちに見守られながら、62年の生涯を閉じました。

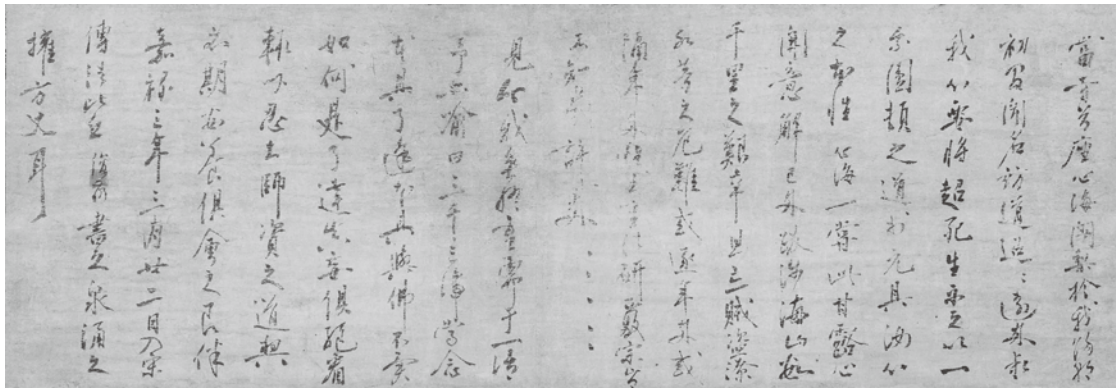


図2 国宝《附法状》泉涌寺蔵

では、俊苧の意図した中国風のお寺とは、どのようなものだったのでしょうか？鎌倉時代末期から南北朝時代に描かれた「東山泉涌律寺図」(図1)をみてみましょう。いまの伽藍とは、ずいぶんと違ってきますよね。画面中央に回廊で結ばれた三門・法堂・仏殿・舍利殿を配し、その周囲に十六観堂や開山塔などの建物や塔頭が確認できます。これが創建当初のすがたと考えられ、異国情緒ただよう風景が、かつては東山の一角に存在していたことがわかります。

さて、泉涌寺と俊苧の関係は、ご理解いただけたと思うのですが、挙げるべき功績はこれだけではありません。とくに、「書」は国の内外で高い評価をうけたと伝記にはみえます。それを如実にしめすのは、嘉禄3年(1227)つまり亡くなる直前、弟子の心海に自らの教えを授けたことを証明し、書き与えた国宝「附法状」(図2)でしょう。本文では、心海の日ごろの修行ぶりを褒めたたえており、師匠の愛情と弟子との固い絆が表れています。

格調高い、凛とした筆づかいに目を投げると、日本的な柔らかい感じの書風とは明らかに異なり、北宋時代の大書家である黄山谷(黄庭堅、1045～1105)の影響が顕著です。これは当時の中国における流行で、伝記によれば、賢人たちの書をわが国に持ち帰ったとありますから、俊苧は留学先で最先端の書道も学んでいたわけですね。やはり、大陸の新しい教えと文化を日本へもたらした功績は、非常に大きいと言わざるを得ません。この点は、どうやら本人も誇りに思っていたようで、末尾の「入宋伝法比丘」、中国に渡り教えを伝えたお坊さんという署名からも十二分にうかがえます。

(美術室 羽田 聡)